

阿保親王墓外構柵改修工事に伴う立会調査

平城天皇皇子阿保親王墓は兵庫県芦屋市翠ヶ丘町に所在する。六甲山系の南側の緩斜面に位置し、芦屋市の遺跡地図には阿保親王塚古墳として掲載されている。本墓の近隣には金津山古墳や打出小槌古墳といった古墳が点在し、本墓もふくめて翠ヶ丘古墳群と呼称されている⁽¹⁾。

今回の調査は、本墓の東西にある外構柵が経年のため老朽化し、改修されることとなったためおこなったもので、本部職員による立会調査は平成19年7月31日～8月3日の4日間実施し、その他の期間については桃山陵墓監区事務所職員や現地担当職員が適宜立ち会った。

西側の工事箇所ではベタ基礎の工法をとることから、長さ約15.7m×幅約0.6m×深さ約0.6mのトレンチを設定した。東側の工事箇所ではブロック基礎の工法をとることから長さ約0.4m×幅約0.4m×深さ約0.5mのトレンチを8つ設定した(第8図)。

西側のトレンチでは、西壁を基準とすると上から黒灰色でトレンチ西隣にある歩道の基礎となる盛土(I層)、地山を削った土や現代遺物が混じる黄茶褐色土(II層)、淡黄白色～明黄褐色の砂層でいわゆる「大阪層群」とされる地山(III層)となっている。地山であるIII層は、西壁周辺では地表面下およそ40cmで確認できるが東壁側では確認できず、地山は東へむかって下がっていることがわかった。ただし、自然地形は西南へむかって下がっており、現状で地山が東へむかって下がっている要因については不明であるが、なんらかの人為的な造成の痕跡であると思われる。また同様に、地山であるIII層の検出レベルは北側から徐々に低くなっており、トレンチ南端では確認できなくなっているが、これは自然地形をある程度反映したものと判断される(第9図)。

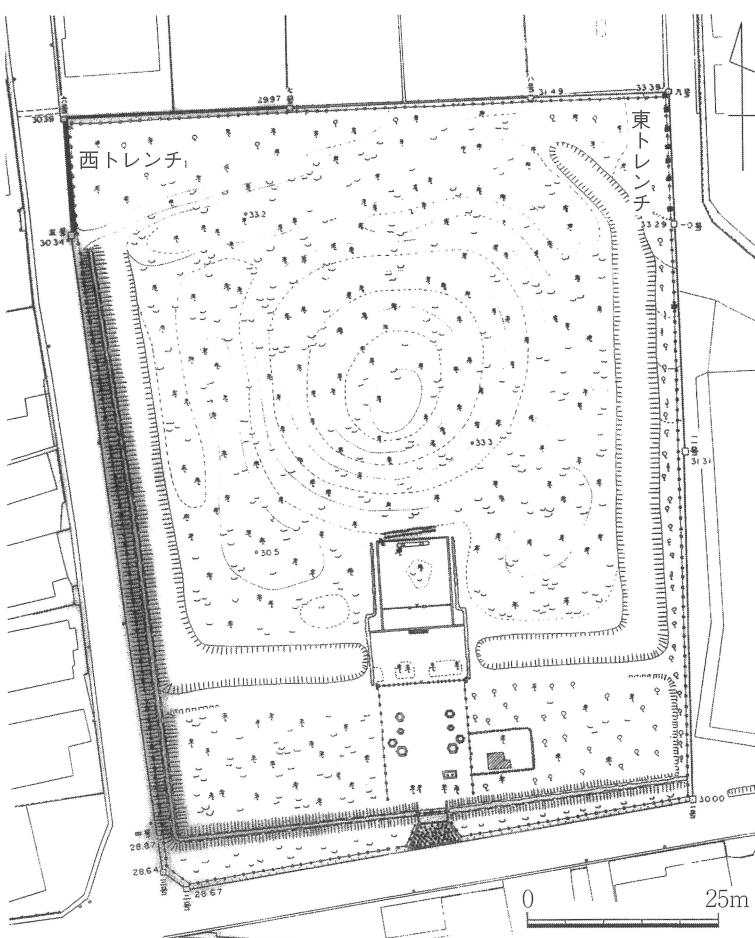
東側におけるトレンチでは、8箇所のいずれにおいても上から黒褐色の表土層(IV層)、黄褐色で現代遺物の混じる盛土層(V層)、黒褐色で東側に隣接する現在の道路が造成される以前の旧表土層(VI層)を確認するのみであった(第9図)。また、東側の第3、4トレンチではVI層内で間地石の上面が確認された。この間地石は平らな面を東側にむけることから東側の道路と本墓を画するものと考えられる。V層の直下で検出されたことから判断して現在の道路が造成される以前の道路と本墓を画していたものであろう。

なお、いずれのトレンチからも出土遺物は検出されなかった。

以上の調査結果から、東側、西側の工事箇所はともに問題なく施工できるものと判断した。

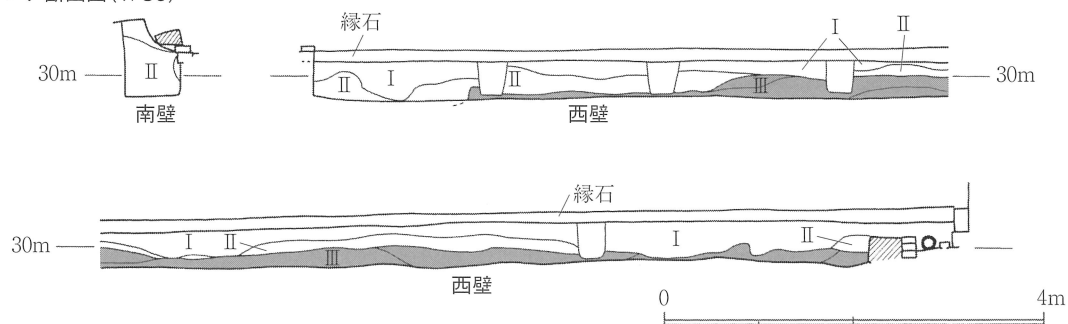
調査にあたっては森岡秀人氏をはじめとする芦屋市教育委員会生涯学習課文化財担当の方々からご指導・ご教示を賜り、現地の担当職員である岡本迪宏氏からは援助を賜った。記して謝意を表したい。

(加藤一郎)

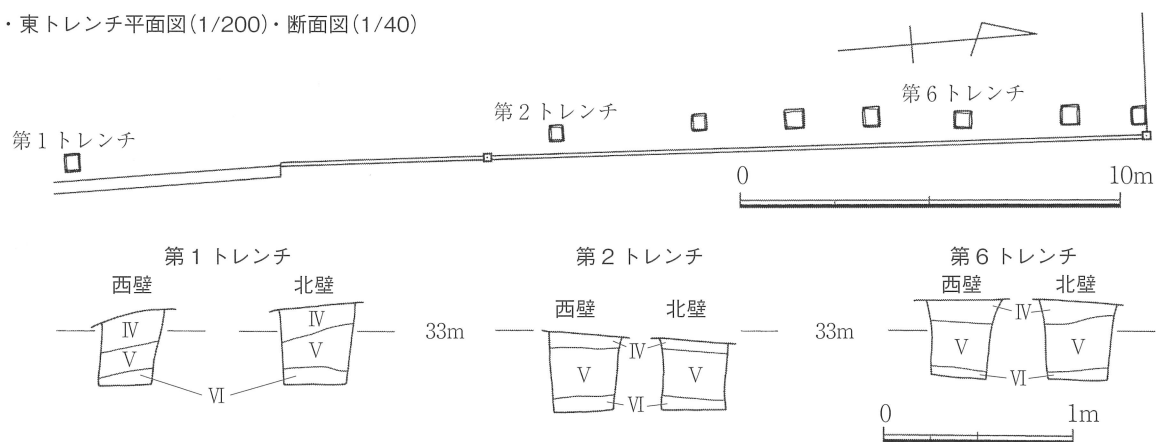


第8図 阿保親王墓 トレンチ配置図 (1/1000)

・西トレンチ断面図(1/80)



・東トレンチ平面図(1/200)・断面図(1/40)



第9図 阿保親王墓 平面図・断面図

註

- (1) 森岡秀人「古墳時代の芦屋地方(上)－近年の遺跡調査をふりかえって－」『兵庫県史』第23号、兵庫県史編集専門委員会、1987年。

なお、本墓出土と伝えられる遺物を親王寺が所蔵しており、以下の文献で報告されている。

村川行弘「親王塚・親王寺所蔵遺物の再検討」『考古学雑誌』第65巻第3号、日本考古学会、1979年。

また、近年、本墓の東側隣接地において開発にともなう発掘調査が芦屋市教育委員会によっておこなわれ、阿保親王塚古墳が前方後円墳であったとするとその前方部に関連する遺構の検出される可能性も想定されたが、そうした遺構は検出されなかった。

芦屋市教育委員会『翠ヶ丘古墳群(第3地点)第2次確認調査結果報告書』、2005年。



1 深草北陵 南北トレンチ 西壁



2 深草北陵 東西トレンチ 北壁



3 阿保親王墓 西トレンチ



4 桂宮西ノ墓地 石列（西から）